☆年間第16主日（7月17日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（創世記 18 章 1-10 節）

その日、主はマムレの樫の木の所でアブラハムに現れた。 暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。 目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。 アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して言った。「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。 水を少々持って来させますから、 足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。 何か召し上がるものを調えますので、疲れをいやしてから、お出かけください。 せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」その人たちは言った。「では、お言葉どおりにしましょう。」

アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。」

アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選び、 召し使いに渡し、急いで料理させた。　アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。 そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。

彼らはアブラハムに尋ねた。「あなたの妻のサラはどこにいますか。」「はい、天幕の中におります」とアブラハムが答えると、彼らの一人が言った。「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、 そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」

第二朗読（使徒パウロのコロサイの教会への手紙 1 章 24-28 節）

皆さん、今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの 苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。 神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者と

なりました。 世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。 この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。 その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。 このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。

福音朗読（ルカ 10 章 38-42 節）

　そのとき、イエスはある村にお入りになった。 すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。 彼女にはマリアという姉妹がいた。 マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。 マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。 しかし、必要なことはただ一つだけである。 マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

　梅雨が戻ってきてまだまだ雨が続いていますね。でもあと少しで梅雨が再び明けます。もう少し我慢しましょう。と言うよりか、この雨は植物動物たちにとってまた人間にとっても大切な神様からの恵みですから大事にいただきましょう。コロナ感染症が再び猛威を振るっています。ワクチンを打てる人はできるだけ打ちましょう。また感染対策が少しなおざりになっていることがあれば気をつけましょう。今日のミサ朗読では「神が私たちを訪れること」がテーマになっているようです。どのような意味があるのでしょう。第一朗読や福音を丁寧に黙想してみましょう。

第一朗読　（創世記 18 章 1-10 節）

今日の創世記はアブラハムに対する主なる神の訪れが語られています。主なる神は旅の人の姿を取りアブラハムのテントの前に立ちます。アブラハムはその旅人が神であるとはわからず、普段からしているように旅人をもてなします。足を洗って寛いでもらい、妻のサラにパン菓子をこさえさせ、自分は肥えた子牛を屠ってもてなしたのです。これは「旅人を懇ろにもてなす」当時のしきたりだったのでしょう。主なる神はその好意に応えて、アブラハムの一番心にあるサラが身ごもって男の子を生むという望みを聞き届けられたのです。これは私たちのもとを訪れられる神の様子を表しているのです。

第二朗読（使徒パウロのコロサイの教会への手紙 1 章 24-28 節）

パウロは「キリストの苦しみの欠けたところ」を身をもって満たす、と述べています。キリストの救いの業に少しの欠けた部分などあるはずはないのですが、パウロは何を言いたいのでしょうか。これは当時始まったばかりの信者の集まり、つまり教会の働きを言っているのだと思います。教会はキリストの体であるというのがパウロの考えだからです。福音宣教の中で、特に異邦人への宣教の中でパウロはさまざまな苦難に出会っていますが、その苦しみをささげるというのです。この務めのために自分は教会に仕えるものとなったと述べているのです。私たちも信仰生活を送るうえで様々な困難に出会いますが、パウロのようにその苦しみをキリストの救いの業に協力する意味で耐え忍ぶようにしましょう。

福音朗読（ルカ 10 章　38-42 節）

今日の福音は有名なマルタとマリアという姉妹の話です。マルタとマリアはベタニアという村に住んでいました。その村にイエスは出かけられたのです。マルタとマリアの家を訪れたイエスは家に入りもてなしを受けますが、姉のマルタは忙しく食事の世話で立ち働きイエスをいわばほったらかして

いました。一方の妹マリアはイエスの側でイエスの話にじっと耳を傾けていたのです。そのような状況でマルタはイエスにマリアに対し仕事を手伝うように言わせようとするのです。それに対しイエスは「マルタ、マルタ・・」とお応えになります。「多くのことに心を乱すのでなく、神の言葉にじっと耳を傾けることこそもっと大事なのだよ」と諭されたのです。神の訪れを心からもてなすとは「神の語られる言葉」にじっと耳を傾けることだということです。神は普通の人の姿で私のもとを訪れられます。その人の言葉にじっと耳を傾けることが大事です。その言葉の中に慈しみの業が隠されているのです。神は私たちを訪れたがっておられます。見逃さないようにしましょう。

P.S.

梅雨明けまであともう少しです。暑い夏がやってきます。コロナの感染が急激に広がっています。エアコンの工事は 7 月 29 日から始まるようです。日曜日のミサには支障ないようです。ミサに来れなくてもご自宅でお祈りはできますので、世界の平和のために一緒に祈りましょう。

カトリック足立教会

主任司祭　野口重光